

# 健康推進員の活動意識

## 経験年数別での比較

ムラヤマ	ヒロシ	タグチ	アツコ
村山	洋史*	田口	敦子*
ムラシマ	サチヨ	リュウ	シュウヘイ <sup>2*</sup>
村嶋	幸代*	柳	修平 <sup>2*</sup>

**目的：**保健分野の住民組織活動の一つとして、行政養成型ボランティアである健康推進員（以下、推進員）活動が存在する。本研究では、推進員の持つ活動意識を経験年数別に比較することを目的とした。

**方法：**対象は、S県A市およびB市で活動する健康推進員600人であり、2004年11月に郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査項目は、基本属性、推進員活動状況、推進員活動への自己評価、自尊感情、地域に対する意識であった。

**結果：**有効回答数は514票（有効回答率85.7%）であった。4～8年群、9年以上群の推進員は、1～3年群の推進員に比べ、やりがいや自己成長感が高かった。同時に、経験年数の長い推進員ほど、活動に困難を感じている割合が高かった。一方、活動に負担を感じている割合は、4～8年群の推進員で最も高く、9年以上群の推進員が最も低かった。また、経験年数の長い推進員ほど、組織内でのまとめ役を担っているという意識や役割に対する責任感が高いという結果であった。

**結論：**推進員活動の活動体制を考える際には、本研究で明らかになった経験年数別での推進員の活動意識の違いを考慮することが重要であると考えられた。

**Key words：**健康推進員，住民組織，意識，経験年数

## I 緒 言

日本の多くの自治体で、健康推進員、保健推進員、健康づくり推進員、食生活改善推進員等と称される行政養成型ボランティア<sup>1)</sup>が存在する。この推進員は、自治体に所属する保健師や栄養士等によって養成、支援され、地域住民の健康の保持増進を目的に活動している。わが国における公衆衛生分野の住民組織活動の歴史の中で、推進員組織のような地域住民組織は、自主的活動でなければならないといわれながらも、その便利さ故に、多くは衛生行政の下部組織として便宜的に活用されてきたという経緯があり<sup>2)</sup>、形骸化している組

織も多い。しかし、2000年に策定された「健康日本21」の中で、地域住民の主体的な健康づくりには、行政だけでなく住民組織、ボランティア組織、地域の民間企業や団体等の主体的な参加が必要であると指摘されており<sup>3)</sup>、推進員活動は「健康日本21」を推進する上で重要な役割を果たすことが期待されている。

推進員活動をはじめとする住民組織活動に関する先行研究は、活動報告であったり、質的分析を用いてメンバーの活動参加に対する意味づけや活動継続の要因といったメンバーの持つ活動意識に焦点を当てているものが多い。メンバーは活動に参加することにより、充実感や喜びを得ることができ<sup>4,5)</sup>、自己の存在を確認できる<sup>5,6)</sup>等、ポジティブな面が報告されている。しかし一方、少数ではあるが、活動に対して「地域住民からの協力が得られない」や「具体的な活動方法が分からない」と困難や負担を感じる等、ネガティブな面も報告されている<sup>7,8)</sup>。このように、推進員は活動に対

\* 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野

<sup>2\*</sup> 東京女子医科大学大学院看護学研究科地域看護学分野  
連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1  
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野 村山洋史

し、ポジティブ、ネガティブの両面を感じていると考えられる。推進員活動の活動体制を考える際には、これらを考慮する必要があるが、質的分析だけでは明らかにできない組織全体における活動意識の傾向も把握し、アセスメントする必要がある。そのため、調査対象を組織全体に広げ、量的に検証することが重要といえる。

さらに、ボランティア活動において、活動に参加することでメンバー個人がどのような変容を遂げたかを把握することは、活動の効果を評定する方法の一つであると考えられている<sup>9)</sup>。推進員組織には、様々な活動経験年数（以下、経験年数とする）の推進員が所属しており、先行研究では、推進員としての経験の長さは推進員個人の心理的、行動的側面に影響を与えるとされている<sup>10~12)</sup>。経験年数を考慮した分析を行うことによって、組織全体の経験年数による傾向を探ることができ、経験年数を重ねることによる変化を明らかにすることで、経験年数を考慮した活動体制を考える手がかりとなることが期待される。

本研究では、行政養成型ボランティアの一つである健康推進員（以下では、この健康推進員を推進員とする）を取り上げ、推進員の持つ活動意識を経験年数別に比較することを目的とした。

## II 方 法

### 1. 予備調査

調査項目を作成するにあたり、予備調査として、2004年7月～9月にS県A市およびB市の推進員13人、行政の担当者9人を対象に、推進員活動の現状や組織全体の印象、活動への考えや思いなどについて、インタビューを実施した。この予備調査の結果を参考に項目を作成した。作成した項目について、2004年10月に調査対象地域の推進員や住民組織支援の経験豊富な保健師に内容を確認してもらい、その結果をもとに修正を加え、本調査の項目とした。

### 2. 本調査

#### 1) 調査対象

予備調査と同じS県A市およびB市で活動する推進員のうち、2004年度に推進員組織に所属する600人全員（A市502人、B市98人）を対象とした。

A市およびB市の推進員活動は、「私達の健康

は私達の手で」をスローガンに、地域における健康づくりリーダーとしてその普及啓発に努め、地域住民の健康の保持増進を積極的に推進することを目的としている<sup>13)</sup>。主な活動に、行政から依頼される健診の受付等の手伝いを行う「行政協力活動」、推進員が居住する地区別に、その地区の住民を対象に行う「地区活動」、推進員組織の下位組織である運動部、食生活部、福祉部、広報部などが、各々活動に取り組む「部活動」等が挙げられる。推進員として活動するためには、地区の自治会長や区長の推薦を受け、市が主催する「健康推進員養成講座」を修了する必要がある、その後市長の委嘱を受ける<sup>13)</sup>。任期はなく<sup>13)</sup>、地域のどの地区にも推進員が配置されるように網羅性を重視した組織づくりが行われていることが特徴である<sup>14)</sup>。推進員活動は、行政の専門職である保健師、栄養士等により支援されており、これらの専門職は推進員に対して、適宜、推進員活動の内容について相談に乗ったり、健康に関する専門知識等について助言を行ったりしている。また、推進員組織の会議にも出席している。

A市およびB市は、S県の東南部に位置し、互いに隣接している。A市、B市は、それまで7町からなる郡であったが、2004年10月に合併を行い、7町のうちの5町がA市に、2町がB市となった。2004年10月時点の人口は、A市93,571人、B市54,901人、老年人口割合は、A市19.5%、B市12.2%であった。また、2005年度の転入率および転出率は、A市26.7%および26.6%、B市41.7%および45.8%であった。産業構造は、A市：第一次産業5.0%、第二次産業44.6%、第三次産業50.4%、B市：第一次産業1.7%、第二次産業50.6%、第三次産業47.7%である。

A市、B市の推進員組織は、2004年10月の合併前は7町からなる郡の組織として活動していた。合併後も、A市、B市の推進員組織は互いに連絡し合って活動している。

#### 2) 調査方法

無記名自記式質問紙調査を郵送法にて実施し、対象者には直接個人宛に調査票を送付した。調査時期は、2004年11月であった。

### 3. 調査項目

#### 1) 基本属性

性別、年齢、現在住んでいる地区での居住年

数、世帯構成、職業の有無、医療・保健・福祉・教育関係の職場での勤務経験の有無、推進員活動以外の他の地域活動への参加経験の有無を尋ねた。

#### 2) 推進員活動状況

経験年数、推進員養成講座を受講した契機、3か月間の行政協力活動の回数、3か月間の地区活動・部活動の回数、現在の推進員組織での役職の有無を尋ねた。

#### 3) 推進員活動への自己評価

##### (1) 活動への思い

「推進員活動はやりがいがある」、「推進員活動によって自分自身が成長できた」の2項目を、「そう思う」から「そう思わない」の4件法で尋ねた。

##### (2) 活動に感じる困難および負担

「あなたは、推進員組織の一員として活動する上で困難だと感じることはありますか」、「あなたは、推進員活動を負担に感じることはありますか」という内容で、「ある」、「ない」の2件法で尋ねた。また、「ある」と回答したものには、困難および負担を感じる理由について、複数選択により尋ねた。なお、困難および負担の理由は、インタビューによる予備調査の結果を参考に作成した。インタビューでは、主な困難の理由として「活動実施に関するもの」と「組織に関するもの」について、負担の理由として「活動自体に関するもの」と「活動によって生じるもの」について多く挙げられたため、それらを考慮し、困難および負担の理由を作成した。

##### (3) 組織内での役割

「推進員組織内でまとめ役を担うことがある」、「推進員組織内の役割に責任を持っている」の2項目を、「そう思う」から「そう思わない」の4件法で尋ねた。

##### (4) 活動への総合的評価

「あなたの所属する推進員組織の活動内容やその効果を総合的にどう評価されますか」という内容で、「よい」から「よくない」の5件法で尋ねた。

#### 4) 自尊感情

RosenbergによるSelf-Esteem Scaleを山本らが邦訳した自尊感情尺度を用いた<sup>15)</sup>。10項目を5件法で尋ね、得点を合計する。得点が高いほど、自己の能力や価値を高く評価していることを示す。本研究におけるCronbach's  $\alpha$ は0.910であった。

#### 5) 地域に対する意識

「地域で起こっている問題に関心を持っている」、「地域に愛着を感じている」の2項目を、「そう思う」から「そう思わない」の4件法で尋ねた。

#### 4. 分析方法

分析に際しては、経験年数を3群にカテゴリ化した上で行った。各変数と経験年数との関連について、一元配置分散分析およびTukeyの多重比較、Kruskal-Wallis検定およびSteel-Dwassの多重比較、 $\chi^2$ 検定、Fisherの直接確率検定を用いて分析した。また、活動に感じる困難および負担の理由について、 $\chi^2$ 検定を用いて経験年数別の割合を比較した。

なお、所属組織間(A市、B市)により、経験年数群の割合を比較したが、差異がなかった( $\chi^2 = 0.227$ ,  $df = 2$ ,  $P = 0.321$ )ため、あわせて分析した。

解析には、SPSS 12.0J for Windowsを用い、有意水準は5% (両側)とした。

#### 5. 倫理的配慮

調査を行うにあたり、S県A市およびB市健康推進連絡協議会と、両市および保健所の推進員担当者に調査の趣旨を説明し、了解を得た。対象者には、調査の趣旨、調査への協力は任意であること、匿名性を保持すること等を記した協力依頼書を調査票に添付した。また、調査票の返送をもって調査への同意とみなした。

### III 結 果

調査票の配布数600票のうち、回収数は514票であり、その全てを有効回答とした(有効回答率85.7%)。なお、分析対象は、A市421票(有効回答率83.9%)、B市83票(有効回答率84.7%)であった。

なお、経験年数のカテゴリ化に関して、活動状況について経験年数による分布を見たところ、4年目以上の推進員は3年目以下の推進員に比べて、3か月間の行政協力活動の回数が明らかに多かった。また、9年目以上の推進員では、役職経験の割合が8年目以下の推進員よりも高かった。そのため、本研究では経験年数に関して、インタビュー結果とあわせ、対象者を「1~3年」、「4~8年」、「9年以上」の3群に分け、比較を行った。

各群の対象者は、1～3年群185人(36.0%)、4～8年群186人(36.2%)、9年以上群143人(27.8%)であり、対象者全体での経験年数の範囲は、1～36年であった。

### 1. 基本属性

対象者の基本属性を表1に示す。

対象者はすべて女性であった。年齢は、対象全体では「50代」が56.2%と最も多く、次いで「40代」19.8%、「60代」17.3%であり、経験年数別の3群間で有意差がみられた。

居住年数は全体で29.9±12.8年であった。世帯構成は、「核家族または2世代家族」が最も多く、46.9%であった。また、59.1%の推進員が職業を持っており、33.5%が医療・保健・福祉・教育関係の職場での勤務経験があった。居住年数、世帯構成、職業の有無、医療・保健・福祉・教育関係の職場での勤務経験の有無では、3群間で有意差はみられなかった。

また、推進員活動以外の他の地域活動への参加経験は、90.7%の推進員が「あり」と回答し、3群間で有意差があり、9年以上群で経験ありの推進員の割合が最も多かった。

### 2. 推進員活動状況

推進員活動状況を表1に示す。

経験年数は全体で6.4±5.0年であった。推進員養成講座を受講した契機は、「自分から希望した」7.2%、「人に誘われた」54.5%、「順番制で受けることになっていた」8.6%であり、3群間で有意差はなかった。3か月間の行政協力活動の回数は全体で1.7±1.8回であり、4～8年群、9年以上群が1～3年群よりも有意に回数が多く、地区活動・部活動の回数は全体で2.6±2.6回であり、9年以上群が1～3年群よりも有意に回数が多かった。また、推進員組織内では、現在、5.6%の推進員が役職を持っていた。3群間で有意差がみられ、9年以上群が最もその割合が高く、14.0%であった。

### 3. 推進員活動への自己評価

推進員活動への自己評価を表2に、経験年数別の困難の理由を図1に、経験年数別の負担の理由を図2に示す。

#### 1) 活動への思い

「推進員活動はやりがいがある」、「推進員活動によって自分自身が成長できた」では、それぞれ

全体の65.9%、80.9%が「そう思う」、「まあそう思う」と回答した。3群間で有意差がみられ、1～3年群に比べ、4～8年群、9年以上群の方が、やりがいがある、および自分自身が成長できたと感じている推進員が有意に多かった。

#### 2) 活動に感じる困難および負担

推進員活動に困難を感じている推進員は、全体で73.2%であった。また、3群間で有意差がみられ、1～3年群、4～8年群、9年以上群の順に困難を感じている推進員の割合が高くなっていった。困難の理由について、対象者全体で最も割合が高かったのは「新しく推進員メンバーに加わってくれる人がいない」であった。経験年数により困難の理由を比較したところ、有意差がみられたのは、「仕事をしている推進員メンバーが増えたため、実際に活動できる人が少ない」、「新しく推進員メンバーに加わってくれる人がいない」、「推進員組織が自治会の一部として位置付いていない」、「新興住宅地の住民への働きかけが難しい」の4つの理由であり、経験年数が長い群ほど、この4項目を困難の理由として挙げている推進員の割合が高くなっていった。

一方、推進員活動に負担を感じている推進員は、全体で58.0%であった。また、3群間で有意差がみられ、負担に感じている推進員の割合は4～8年群が最も高く、次いで1～3年群、9年以上群であった。負担の理由について、対象者全体で最も割合の高かったのは「時間的な余裕がなくなる」であった。経験年数による負担の理由を比較したところ、「その他」以外では有意差がみられなかった。

#### 3) 組織内での役割

「推進員組織内でまとめ役を担うことがある」、「推進員組織内の役割に責任を持っている」では、両者ともに3群間で有意差があり、1～3年群、4～8年群、9年以上群の順にまとめ役を担う、および役割に責任を持っている推進員が有意に多かった。

#### 4) 活動への総合的評価

全体の48.9%が「よい」、「まあよい」と回答し、43.6%が「普通」と回答した。なお、3群間で有意差はみられなかった。

### 4. 自尊感情

自尊感情得点を表3に示す。

表1 基本属性，推進員活動状況—経験年数別での比較—

n=514

	全体 n=514	1~3年 n=185	4~8年 n=186	9年以上 n=143	P値
基本属性					
性別					
女	514(100.0)	185(100.0)	186(100.0)	143(100.0)	—
年齢					
20~30代	11( 2.1)	8( 4.3)	1( 0.5)	2( 1.4)	*** <sup>a</sup> BC
40代	102( 19.8)	44( 23.8)	46( 24.7)	12( 8.4)	
50代	289( 56.2)	110( 59.5)	103( 55.4)	76( 53.1)	
60代	89( 17.3)	18( 9.7)	31( 16.7)	40( 28.0)	
70代以上	6( 1.2)	1( 0.5)	1( 0.5)	4( 2.8)	
居住年数	29.9±12.8	28.2±12.5	30.4±13.2	31.5±12.4	ns
世帯構成					
一人暮らし	4( 0.8)	1( 0.5)	1( 0.5)	2( 1.4)	ns <sup>c</sup>
夫婦のみ	84( 16.3)	23( 12.4)	28( 15.1)	33( 23.1)	
核家族または2世代家族	241( 46.9)	86( 46.5)	90( 48.4)	65( 45.5)	
3世代家族	145( 28.2)	59( 31.9)	58( 31.2)	28( 19.6)	
その他	17( 3.3)	8( 4.3)	5( 2.7)	4( 2.8)	
職業の有無					
あり	304( 59.1)	113( 61.1)	117( 62.9)	74( 51.7)	ns <sup>b</sup>
なし	191( 37.2)	68( 36.8)	65( 35.0)	58( 40.6)	
医療・保健・福祉・教育関係の職場での勤務経験の有無					
働いている，又は働いたことがある	172( 33.5)	60( 32.4)	58( 31.2)	54( 37.8)	ns <sup>b</sup>
働いたことがない	307( 59.7)	114( 61.6)	121( 65.1)	72( 50.3)	
推進員活動以外の他の地域活動への参加経験の有無					
あり	466( 90.7)	159( 86.0)	168( 90.3)	139( 97.2)	** <sup>b</sup>
なし	45( 8.8)	24( 13.0)	17( 9.1)	4( 2.8)	
推進員活動状況					
所属組織					
A市	430( 83.7)	157( 84.9)	159( 85.5)	114( 79.7)	ns <sup>b</sup>
B市	84( 16.3)	28( 15.1)	27( 14.5)	29( 20.3)	
経験年数	6.4±5.0	2.1±0.8	5.8±1.4	12.8±4.7	*** ABC
推進員養成講座を受講した契機					
自分から希望した	37( 7.2)	15( 8.1)	12( 6.5)	10( 7.0)	ns <sup>b</sup>
人に誘われた	280( 54.5)	96( 51.9)	106( 57.0)	78( 54.5)	
順番制で受けることになっていた	44( 8.6)	19( 10.3)	17( 9.1)	8( 5.6)	
その他	56( 10.9)	22( 11.9)	14( 7.5)	20( 14.0)	
3か月間の行政協力活動の回数	1.7±1.8	1.3±1.0	2.0±2.1	2.0±1.9	*** AB
3か月間の地区活動・部活動の回数	2.6±2.6	2.1±1.7	2.8±3.0	3.1±2.8	** B
現在の推進員組織内での役職の有無					
あり	29( 5.6)	0( 0.0)	9( 4.8)	20( 14.0)	*** <sup>b</sup>
なし	484( 94.2)	185(100.0)	177( 95.2)	122( 85.3)	

値はn(%)またはMean±SD，欠損値は除く

無印：一元配置分散分析，Tukeyの多重比較，a：Kruskal-Wallis検定，Steel-Dwassの多重比較，b： $\chi^2$ 検定，c：Fisherの直接確率検定

A：1~3年群 vs 4~8年群，B：1~3年群 vs 9年以上群，C：4~8年群 vs 9年以上群：P&lt;0.05

\*\*\*：P&lt;0.001，\*\*：P&lt;0.01，ns：not significant

表2 推進員活動への自己評価—経験年数別での比較—

n = 514

	全体 n = 514	1~3年 n = 185	4~8年 n = 186	9年以上 n = 143	P値
推進員活動への自己評価					
活動への思い					
推進員活動はやりがいがある					
そう思う	84(16.3)	27(14.6)	22(11.8)	35(24.5)	*** <sup>a</sup> AB
まあそう思う	255(49.6)	74(40.0)	114(61.3)	67(46.9)	
あまりそう思わない	122(23.7)	56(30.3)	37(19.9)	29(20.3)	
そう思わない	36( 7.0)	19(10.3)	9( 4.8)	8( 5.6)	
推進員活動によって自分自身が成長できた					
そう思う	177(34.4)	44(23.8)	66(35.5)	67(46.9)	**** <sup>a</sup> AB
まあそう思う	239(46.5)	81(43.8)	97(52.2)	61(42.7)	
あまりそう思わない	63(12.3)	38(20.5)	15( 8.1)	10( 7.0)	
そう思わない	14( 2.7)	10( 5.4)	1( 0.5)	3( 2.1)	
活動に感じる困難および負担					
推進員組織の一員として活動する上で困難と感ずることがある					
あり	376(73.2)	119(64.3)	141(75.8)	116(81.1)	** <sup>b</sup>
なし	133(25.9)	63(34.1)	44(23.7)	26(18.2)	
推進員活動を負担に感ずることがある					
あり	298(58.0)	107(57.8)	120(64.5)	71(49.7)	* <sup>b</sup>
なし	211(41.1)	75(40.5)	65(34.9)	71(49.7)	
組織内での役割					
推進員組織内でまとめ役を担うことがある					
そう思う	71(13.8)	6( 3.2)	22(11.8)	43(30.1)	**** <sup>a</sup> ABC
まあそう思う	112(21.8)	16( 8.6)	56(30.1)	40(28.0)	
あまりそう思わない	128(24.9)	45(24.3)	57(30.6)	26(18.2)	
そう思わない	126(24.5)	79(42.7)	30(16.1)	17(11.9)	
推進員組織内の役割に責任を持っている					
そう思う	145(28.2)	31(16.8)	53(28.5)	61(42.7)	**** <sup>a</sup> ABC
まあそう思う	256(49.8)	90(48.6)	101(54.3)	65(45.5)	
あまりそう思わない	71(13.8)	39(21.1)	23(12.4)	9( 6.3)	
そう思わない	16( 3.1)	9( 4.9)	3( 1.6)	4( 2.8)	
活動への総合的評価					
推進員組織の活動内容やその効果の総合的評価					
よい	77(15.0)	24(13.0)	26(14.0)	27(18.9)	ns <sup>a</sup>
まあよい	174(33.9)	62(33.5)	62(33.3)	50(35.0)	
普通	224(43.6)	79(42.7)	88(47.3)	57(39.9)	
あまりよくない	31( 6.0)	16( 8.6)	8( 4.3)	7( 4.9)	
よくない	4( 0.8)	2( 1.1)	0( 0.0)	2( 1.4)	

値はn(%), 欠損値は除く

a: Kruskal-Wallis 検定, Steel-Dwass の多重比較, b:  $\chi^2$  検定A: 1~3年群 vs 4~8年群, B: 1~3年群 vs 9年以上群, C: 4~8年群 vs 9年以上群:  $P < 0.05$ \*\*\*:  $P < 0.001$ , \*\*:  $P < 0.01$ , \*:  $P < 0.05$ , ns: not significant

図1 経験年数別での困難の理由 (n=514)

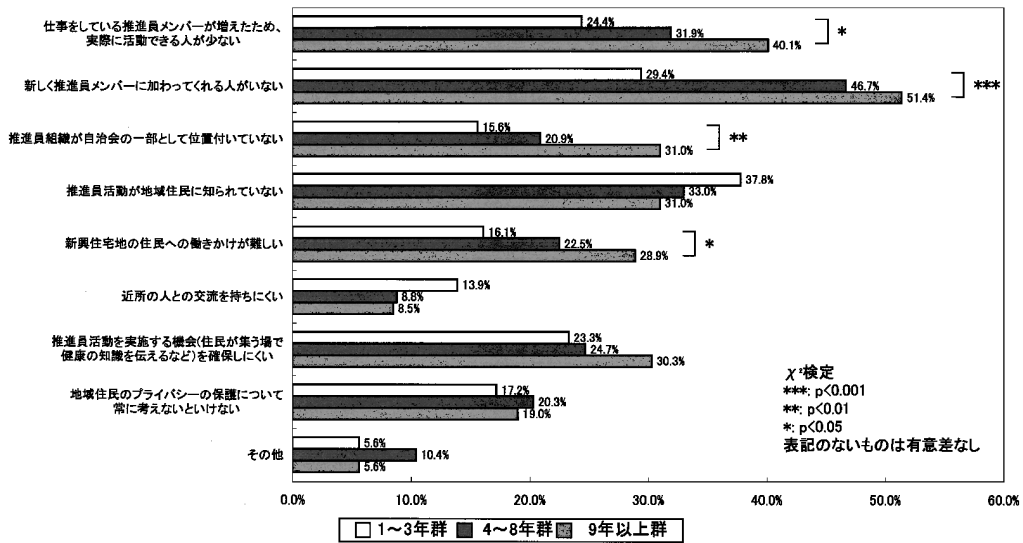
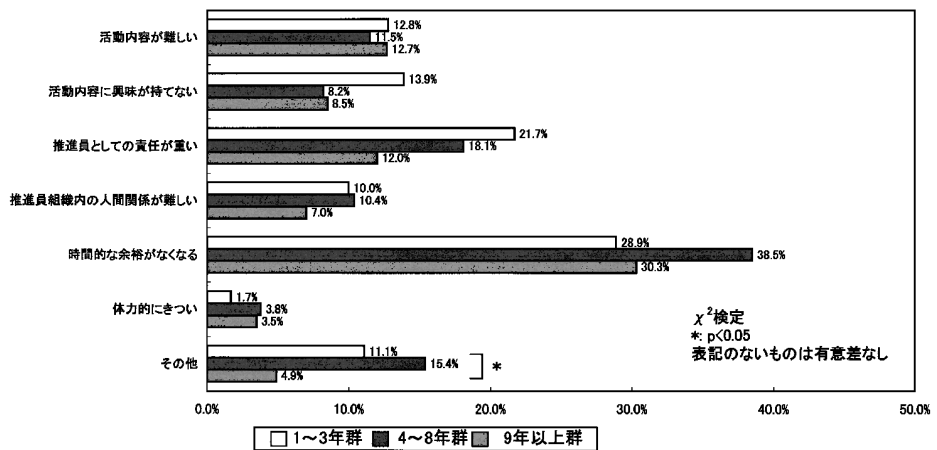


図2 経験年数別での負担の理由 (n=514)



自尊感情得点は $35.0 \pm 6.3$ 点であり、9年以上群が1~3年群よりも有意に得点が高かった。

### 5. 地域に対する意識

地域に対する意識を表3に示す。

「地域で起きている問題に関心を持っている」では、「そう思う」、「まあそう思う」に回答した推進員は、全体の78.0%であり、「地域に愛着を感じている」では、全体の86.3%であった。両項目とも、3群間で有意差があり、9年以上群が1~3年群よりも有意に地域で起きている問題に関心を持ち、地域に愛着を感じているという結果

## IV 考 察

### 1. 経験年数別比較の意義

本研究では、推進員を「1~3年」、「4~8年」、「9年以上」の3群に分けて分析を行った。推進員組織には様々な特性のメンバーが所属しており、それぞれの特性を活かした活動体制を考えることで、地域を基盤としたヘルスプロモーション活動を効果的に行うことができるようになることが期待できる。その中でも、経験年数は推進員個人の

表3 自尊感情、地域に対する意識—経験年数別での比較—

	全体 n=514	1~3年 n=185	4~8年 n=186	9年以上 n=143	P値
自尊感情 (Range : 10-50)	35.0±6.3	34.1±6.4	34.7±6.4	36.7±5.8	** B
地域に対する意識					
地域で起きている問題に関心を持っている					
そう思う	161(31.3)	51(27.6)	62(33.3)	48(33.6)	** <sup>a</sup> B
まあそう思う	240(46.7)	85(45.9)	84(45.2)	71(49.7)	
あまりそう思わない	78(15.2)	38(20.5)	30(16.1)	10( 7.0)	
そう思わない	7( 1.4)	4( 2.2)	1( 0.5)	2( 1.4)	
地域に愛着を感じている					
そう思う	232(45.1)	71(38.4)	84(45.2)	77(53.8)	*** <sup>a</sup> B
まあそう思う	212(41.2)	88(47.6)	79(42.5)	45(31.5)	
あまりそう思わない	39( 7.6)	19(10.3)	14( 7.5)	6( 4.2)	
そう思わない	10( 1.9)	3( 1.6)	2( 1.1)	5( 3.5)	

値は n (%) または Mean ± SD, 欠損値は除く

無印: 一元配置分散分析, Tukey の多重比較, a : Kruskal-Wallis 検定, Steel-Dwass の多重比較

B : 1~3年群 vs 9年以上群: P<0.05

\*\* : P<0.01, \* : P<0.05

心理的、行動的側面に影響を与えるといわれている<sup>10~12)</sup>。そのため、経験年数別に推進員の持つ意識を比較し、そこにどのような違いが生じているかを考えることは、今後の推進員活動の活動体制を考える上で意義を持つといえる。

## 2. 経験年数別での推進員の持つ意識の比較

### 1) 推進員活動への自己評価

#### (1) 活動への思い

4~8年群、9年以上群は、1~3年群に比べ、やりがいや自分自身の成長を感じているという結果であった。ボランティア活動における経験年数の長さが満足感の高さと関連するという先行研究が存在する<sup>16,17)</sup>。また、推進員は活動の中で、人や地域の役に立ったという体験ややり遂げたという充実感を得られるといわれており<sup>4,5)</sup>、推進員としての活動年数が長くなると、やりがいや自己成長感につながる体験が積み重なるものと考えられる。

#### (2) 活動に感じる困難および負担

活動に感じる困難は、1~3年群、4~8年群、9年以上群の順にその割合が有意に高くなっていった。経験年数が長くなると、組織でのまとめ役や役職を担うものが多くなり、活動実施や組織運営に関わることが多くなる。そのため、経験年数が

短い推進員に比べて活動に困難を感じる推進員の割合が高かったのではないかと考えられる。

9年以上群で最も割合が高く、経験年数による有意差がみられた困難の理由のうち、「推進員組織が自治会の一部として位置付いていない」、「新興住宅地の住民への働きかけが難しい」は、活動を円滑に進め、活動を展開するにあたっての困難と考えられる。地域に根ざした活動を行っていく上で、自治会と連携がとれていることは重要な要素である<sup>18)</sup>。また、他の地域からの転入者が多い新興住宅地は、地縁や住民同士の関係が希薄であり、推進員が気軽に入り込むことが難しいとされ<sup>7)</sup>、今後、推進員活動を展開する際の課題であるといえる。9年目以上の推進員は、活動においてリーダーシップをとることが多くなるため、これらを感じる割合が高くなったものと考えられる。また、「仕事をしている推進員メンバーが増えたため、実際に活動できる人が少ない」、「新しく推進員メンバーに加わってくれる人がいない」は、経験年数が長い推進員ほど推進員組織の運営に関わることが多く、それに伴い、これらを実感することが多くなるため、9年以上群でこの2つを困難の理由に挙げるものの割合が高かったと考えられる。以上のように、9年目以上の推進員は



他の年数群の推進員と比較して、「活動展開に関する困難」と「組織運営に関する困難」の2側面を感じている推進員が多いことが明らかになった。

活動に感じる負担は、4～8年群で最も負担を感じている推進員の割合が高く、次いで1～3年群であり、9年以上群が最も低かった。また、負担の理由では、「その他」においてのみ3群間に有意差がみられた。推進員活動を9年以上継続すると、効率よく活動する方法を会得する<sup>8)</sup>、また、活動に必要な知識や技術が蓄積されたり、多くの人と関わる中で活動に対するサポートを得たり励ましを受けたりする<sup>4,5,19,20)</sup>ことによって、活動に感じる負担を軽減することができていた可能性が考えられる。

### (3) 組織内での役割

経験年数の長い推進員は、実際に与えられる役割だけでなく、活動におけるリーダーシップをとり、役割や立場についての責任を実感していることが明らかになった。役割に責任感を持っている経験年数の長い推進員を中心に推進員活動を展開していくことは、活動を活性化させる上で有効であると考えられる。同時に、リーダーシップをとることが多い経験年数の長い推進員の持つまとめ役としてのノウハウ等を伝達する機会を設けることは、次世代のリーダーシップをとれる人材を育成する上で有効ではないかと考えられる。

### (4) 活動への総合的評価

活動への総合的評価においては、3群間で差はみられなかった。この理由として、総合的評価は、「活動への思い」等のポジティブな面、「活動に感じる困難および負担」等のネガティブな面の両面が考慮され判断される。そのため、例えば、9年以上群は、他の年数群に比べ、やりがいや自己成長感も高いが、困難の割合も高いといったことにより、差がみられなくなったものと考えられる。しかし、どの年数群でも、活動に対して「よくない」、「まあよくない」といった否定的な評価をしている推進員は少ないことから、推進員活動に参加したことによって、メンバーは何らかのメリットを得られている可能性があると考えられる。

### 2) 自尊感情

自尊感情得点では、9年以上群は1～3年群に比べて有意に得点が高かった。ボランティア活動に関する先行研究によると、ボランティア活動に

参加することで自尊感情が高まるとの報告がある<sup>21,22)</sup>。推進員活動はボランティア性の強い活動であり<sup>1)</sup>、9年以上群の推進員は、長年推進員として活動する中で自尊感情が高まったものと考えられる。

### 3) 地域に対する意識

9年以上群は1～3年群に比べて、地域で起きている問題への関心が高く、地域への愛着が高かった。先行研究では、地域住民組織活動を経験する中で、地域にも目が向くようになり<sup>5,23,24)</sup>、地域に対する意識が促進される<sup>25)</sup>と報告されており、本研究の結果もそれを支持したといえる。

## 3. 本研究の意義と限界

これまで住民組織活動に関する研究では、活動報告や質的分析を行ったものが多かったが、本研究ではそれを量的に実証し、組織全体の傾向を経験年数別に明らかにした。市町村合併が進行し、地域保健活動の再編が迫られている現在、地域活動の積極的な担い手としてのポテンシャルティータを持つ推進員の活動意識の実態を横断的に捉えた点に本研究の意義があると考えられる。

しかし、本研究の結果からは、たとえば「活動はやりがいがあり、自分自身が成長できると感じられる、または、活動に困難や負担を感じない推進員が長年活動を継続できている」といった可能性があることも否定できない。今後、縦断的に調査し、因果関係を明らかにしていく必要性、また、途中で推進員活動をやめたものを対象とした調査も行っていく必要がある。さらに、本研究は対象地域、対象組織が限局されているため、今後は地域特性、組織特性の異なる対象についても調査していく必要があるといえる。

## V 結 語

健康推進員の持つ活動意識を経験年数別に比較することを目的に調査を行った。その結果、4～8年、9年以上の推進員は、1～3年の推進員に比べ、やりがいや自己成長感が高かった。同時に、経験年数の長い推進員ほど、活動に困難を感じている割合が高かった。一方、活動に負担を感じている割合は、4～8年の推進員で最も高く、9年以上の推進員が最も低かった。また、経験年数の長い推進員ほど、組織内でのまとめ役を担っているという意識や役割に対する責任感が高いという結

果であった。推進員活動の活動体制を考える際には、本研究で明らかになった経験年数別での推進員の活動意識の違いを考慮することが重要であると考えられた。

(受付 2006. 9.12)  
(採用 2007. 7.23)

## 文 献

- 1) 大江 浩, 石川 宏. 健康増進における住民ボランティア活動—行政養成型ボランティアの意義と課題—. 公衆衛生 1992; 56(1): 58-62.
- 2) 久常節子. グループ・組織化活動と住民. 久常節子, 島内節編. 地域看護学講座—グループ・組織化活動—. 東京: 医学書院, 1994; 16-26.
- 3) 星 旦二, 藤原佳典. 「健康日本21」地方計画のめざすもの. 保健婦雑誌 2000; 56(5): 365-370.
- 4) 星野明子, 成木弘子, 飯田澄美子. F市保健推進員活動における参加者の活動体験とその意味. 聖路加看護学会誌 1999; 3(1): 48-53.
- 5) 成木弘子, 飯田澄美子. コミュニティ・ケアを目的とした自主組織活動への参加を継続する要因—都市における事例研究—. 日本健康教育学会誌 2003; 11(2): 93-103.
- 6) 秋山さちこ, 海老真由美, 村山正子. 住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造. 日本地域看護学会誌 2004; 7(1): 35-40.
- 7) 高橋香子, 斎藤美華, 安斎由貴子, 他. 市町村における健康推進員の役割認識と活動内容に関する検討. 宮城大学看護学部紀要 2002; 5(1): 95-101.
- 8) 織田初江, 長沼理恵, 長田久子, 他. 住民の主体的参加を促す地域看護活動に関する一考察—保健推進員の活動意欲に影響する要因—. 金沢大学医学部保健学科紀要 2001; 24(2): 171-175.
- 9) 川元克秀. ボランティア活動による活動者個人の変容. ボランティア白書 2001. 東京: 日本青年奉仕協会, 2001; 158-172.
- 10) 星野明子, 桂 敏樹, 成木弘子. ヘルスプロモーションにおける地域組織活動の効果—F市保健推進員活動が活動参加者, 家族および地域住民への働きかけに与える影響—. 日本健康医学会雑誌 2001; 10(1): 12-19.
- 11) 星野明子, 桂 敏樹, 成木弘子. 保健推進員活動が参加者の心理的側面に与える影響. 日本健康医学会雑誌 2002; 11(1): 2-7.
- 12) 星野明子, 桂 敏樹, 成木弘子. F市保健推進員活動の継続経験が参加者の保健行動へ与える影響. 日本健康医学会雑誌 2003; 12(1): 38-42.
- 13) 滋賀県健康福祉部健康対策課. いきいきのびのび健康づくり—健康推進員ハンドブック—. 滋賀: 滋賀県健康福祉部健康対策課, 1990; 1-15.
- 14) 齊藤 進. 地域組織活動をどう強化・活性化させるか—調査結果から行政支援のあり方を考える—. 生活教育 2001; 45(8): 27-31.
- 15) 山本真理子, 松井 豊, 山成由紀子. 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究 1982; 30(1): 64-68.
- 16) Omoto AM, Snyder M. Sustained helping without obligation: motivation, longevity of service, and perceived attitude change among AIDS volunteers. Journal of Personality and Social Psychology 1995; 68(4): 671-686.
- 17) Davis MH, Hall JA, Meyer M. The first year: influence on the satisfaction, involvement, and persistence of new community volunteers. Personality and Social Psychology Bulletin 2003; 29(2): 248-260.
- 18) 大橋俊子, 岩本葉子, 亀山敦子, 他. 健康づくり推進員による住民主導を目指した地域保健活動の促進要因に関する研究. 保健医療科学 2005; 54(1): 74-78.
- 19) Hinton A, Downey J, Lisovicz N, et al. The Community Health Advisor Program and the Deep South Network for Cancer Control: health promotion programs for volunteer community health advisors. Family and Community Health 2005; 28(1): 20-27.
- 20) Hardy CM, Wynn TA, Huckaby F, et al. African American community health advisors trained as research partners. Family and Community Health 2005; 28(1): 28-40.
- 21) Clary EG, Snyder M, Ridge RD, et al. Understanding and assessing the motivation of volunteers: a functional approach. Journal of Personality and Social Psychology 1998; 74(6): 1516-1530.
- 22) Omoto AM, Snyder M, Martino SC. Volunteerism and the life course: investigating age-related agendas for action. Basic and Applied Social Psychology 2000; 22(3): 181-197.
- 23) Booker VK, Robinson JG, Kay BJ, et al. Changes in empowerment: effects of participation in a lay health promotion program. Health Education & Behavior 1997; 24(4): 452-464.
- 24) Johnson RE, Green BL, Anderson-Lewis C, et al. Community Health Advisors as Research Partners: an evaluation of the training and activities. Family and Community Health 2005; 28(1): 41-50.
- 25) Omoto AM, Snyder M. Consideration of community: the context and process of volunteerism. American Behavioral Scientist 2002; 45(5): 846-867.

## Levels of the consciousness of activities among health promotion volunteers Comparison by years of volunteer's experience

Hiroshi MURAYAMA\*, Atsuko TAGUCHI\*, Sachiyo MURASHIMA\*, and Shuhei RYU<sup>2\*</sup>

**Key words** : health promotion volunteer, community organization, consciousness, years of experience

**Objective** Health promotion volunteers (HPVs) are members of community health organizations. They are delegated health promotion activities in local communities in Japan, under support of municipal administrative officers, including public health nurses. The purpose of the present study was to compare the levels of consciousness of activities among HPVs by years of experience.

**Methods** The subjects were 600 HPVs in two cities in a prefecture. A mail-in self-check questionnaire survey was conducted on November 2004, covering items on “demographic-data,” “the condition of activities of HPVs,” “self-evaluation of activities of HPVs,” “self-esteem,” and “consciousness in the community.”

**Results** A total of 514 questionnaires were analyzed (valid response rate: 85.7%). HPVs in the groups of 4–8 years and 9 and more years of experience, felt more challenge and had a greater feeling of self-growth than those in the group of 1–3 years, although HPVs in the group with many years of experience felt more difficulty with the activities. HPVs in the 4–8 year group experienced the highest sense of burden, and HPVs in the 9 and more years group the lowest. Moreover, consciousness in taking leadership in organization of HPVs was stronger, and sense of responsibility for roles as HPVs were greater in the group of HPVs who had many years of experience.

**Conclusion** In building structures of activity of HPVs it is important to consider their levels of consciousness of the activities by years of experience, as clarified in this study.

---

\* Department of Community Health Nursing, Division of Health Sciences and Nursing, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo, Japan

<sup>2\*</sup> Section of Community Health Nursing, Graduate School of Nursing, Tokyo Women's Medical University, Japan